


# 京舞妓殺人事件

山村美紗



集英社文庫

 集英社文庫

きょうまい こきつじん じけん  
京舞妓殺人事件

1992年3月25日 第1刷

定価はカバーに表  
小してあります。

著者 やま むら み き  
山 村 美 紗

発行者 若 菜 正

発行所 株式会社 集 英 社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10  
〒101-50

(3230) 6100 (編集)

電話 東京 (3230) 6393 (販売)

3230) 6080 (製作)

印刷 図書印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた  
場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。  
送料小社負担でお取り替えいたします。

© M. Yamamura 1992

Printed in Japan

ISBN4-08-749792-5 C0193

集英社文庫

京舞妓殺人事件

山村美紗



集英社版



目次

第一章	火まつりの夜の惨劇……………	六
第二章	ニセブランド製品の秘密……………	三二
第三章	疑惑の関係……………	五五
第四章	密室の死体……………	七三
第五章	捜査本部……………	九六
第六章	ニセモノの時計……………	一二三
第七章	殺人現場の謎……………	一四六
第八章	不吉なおみくじ……………	一七三

第九章	密室の謎	一九二
第十章	解けたトリック	二二〇
第十一章	意外な犯人	二三三

解説 片岡秀太郎

京舞妓殺人事件

## 第一章 火まつりの夜の惨劇

## 1

京都に住む沢木潤一郎は、まだ四十歳すぎだが、N展の審査員もしている有名な日本画家である。

彼は、仕事の関係もあつて、よく祇園のお茶屋に行き、舞妓たちとも顔なじみである。その中で、小菊という一番売れっ子の舞妓が、沢木を慕っていて、沢木も、彼女が可愛くて仕方がなくなっている。

その日も、沢木は、小菊と会うことになっていた。

十月二十二日は、京都では、昼は時代祭、夜は、鞍馬の火まつりで、一年中で最も賑い、観光客も多い日である。

沢木は、昼は、小菊たちの出演する時代祭を見て、夜は、小菊を連れて、火まつりを見



に行く予定だった。

時代祭というのは、葵祭、祇園祭とともに、京都の三大祭の一つで、千年続いた京都の、それぞれの時代の風俗をあらわす行列が、華やかに、都大路をねり歩くのである。

その中の女人列には、京都の祇園、先斗町、上七軒などの花街の芸者が、毎年交代で出演し、小野小町や、紫式部などに扮することも、評判をよんでいた。

今年は、小菊たちの祇園が当番になっていて、小菊も、小野小町役で出ることになっていた。

「ほんまは、時代祭に出るのは、芸妓さんだけで、舞妓は出られへんのどす。そやけど、急に、うちの置屋の小婉姐さんが盲腸にならはったんで、代りに出して貰うことになったんどす。うれしおすウ！」

と、数日前、小菊が大よろこびで、沢木に報告に来たのである。

「それはよかったね。小菊が小野小町だなんて最高だよ。きれいだろうね」

沢木の顔がほころんだ。

「いやア、心配なんどす。うまくいきますやろか」

小菊は、はにかみながら下から沢木をすくい上げようようにみつめた。

「大丈夫だよ。僕も見に行くから、しっかりやりなさい。写真も撮るからね」

「ほんまどすか？ どないしよう」

小菊は、幼い子供のように手を叩きながら、軀をゆすった。

午前十一時すぎに、沢木は、行列が出発する御所の庭に行った。

すでに、みわたす限りの見物客が手に手にカメラを持って行列のはじまるのを待っている。今日の人出は、二十万人以上だという。外人観光客の姿も多かった。

やがて十二時になり、行列の先頭が出発した。

沢木は、人ごみのうしろから、行列をみつめた。

ピーピーピーヒョロロと笛の音がして、最初の維新勤王鼓笛隊列を前ぶれに、幕末志士列が来た。

坂本竜馬や、桂小五郎、高杉晋作が通る。

そのあと、徳川城使上洛列、江戸時代婦人列、豊公参朝列、織田公上洛列と、現代から逆順に次々と沢木の前を通り過ぎる。

一時間近くなったとき、ようやく、待ち兼ねた平安朝婦人列の番になった。

沢木は、軀を乗り出し、カメラを構えた。

平安朝衣裳の貴族たちにかこまれて、黒い牛が牛車をひいて来た。

そのあとを、皇女和宮、蓮月尼、玉瀾、吉野大夫、出雲の阿国、淀君、阿仏尼、静御前、和氣広虫が、しずしずと歩いている。

皇女和宮以外はみんな祇園の芸妓で、沢木の知っている妓ばかりなのだが、白塗りにし

ているので、すぐには誰かわからない。通りすぎてから、

「あ、今のは佳つ乃だ！」

とか、

「美代竜じゃないかな？」

と思うくらいである。

「それにしても、小野小町は遅いなあ」

と、沢木が、狙っていたカメラをおろして、もう一度、行列のうしろをのぞき込んだとき、やっと、小野小町がやって来た。

「きれいだ！」

沢木は、思わず呟いた。

十二単衣を着た小菊は、一きわ美しく、しかも気品があった。みんなも同じ思いとみえて観光客の間から、歓声があがった。小菊が、緊張してうつむき加減になっているのが初々しい。

沢木は、夢中で何枚もシャッターを切った。

小菊は、ひよいと観客席の方を見た。沢木を探しているのがわかった。

沢木は、カメラを高くあげた。小菊がこちらを向いた。沢木と視線が合うと、にっこりと笑った。眼尻の紅が可愛く色っぽい。

沢木も、笑みを返してから、再び、シャッターを切った。

彼女が行き過ぎてしまうと、沢木は、現金にもあとの行列を見るのが億劫おっくうになって、観客席から離れ、御所の庭をぶらぶらと歩き出した。

沢木の眼には、今見て来たばかりの小菊の美しい十二単衣姿がいつまでも焼きついていった。

## 2

夜になって、沢木は、小菊を連れて、鞍馬に出かけた。

鞍馬というのは、京都市の北にあり、鞍馬川あまがわと貴船川きふねがわの合流したあたりの地名である。

牛若丸が修行したということでも有名である。

小菊は、今は、いつも通りの日本髪に、普段着の着物を着ている。

「時代祭では、随分疲れただろう？」

「へえ、一所懸命どしたさかい、その時はわからへんかったんどすけど、着物をぬいだら、へたへたと座り込んでしもて……」

「でも、写真は随分たくさん撮ったから、出来てくるのが楽しみだね」

沢木は、山道を歩きながらいった。

「おおきに。でも、おかしい顔してるのと違いますやろか。緊張して、怖い顔してました

よって」

小菊は、心配そうにいった。

「そんなことはないよ。とつてもきれいだった。今度は、あの姿を絵に描いてみたいな」

「ほんまに、ほんまどすか？ うれしい」

小菊は、やつと、笑みを浮かべた。

お座敷のときと違って、ほとんど素顔に近い化粧つけのない顔が、幼くて可愛かった。

二人は、鞍馬の町に出た。

「松明が、きれいどすなあ」

小菊は、まっ暗い町の路々に並んだ大松明を指して、感動したようにいった。

家々の軒先には、篝火が燃え、襦袢に前掛け、武者わらじの子供たちが、はしやぎまわっている。ここも、観光客が一杯だった。

やがて、

「サーレイ！ サイリヨウ！」

と掛声がした。締め込み姿に、わらじばきの若者の大群が、大松明をかかげて、練り歩いて来た。

「危いから、こっちへ退いていた方がいいよ」

沢木が、あわてて、小菊を横にかばった。

勢いのいい若者たちは、大挙して仁王門の下に集り、二百五十本の松明が、あかあかと燃え上る。

石段下の精進竹にたてられた注連縄しゆめなわが切られると、若者たちは、わあつと歓声をあげて、参道奥の由岐神社へ駆け上り、やがて、二基の神輿みここしをゆさぶりながら、駆けおりてくる。祭りは、最高潮に達し、人々が、うねりながら移動する。

あたり一面、火の海、火の渦だった。小菊の頬ほおも、紅潮していた。神輿がそばにやって来た。

神輿の先端には、若者二人ずつが、両足を高くさし出して、ぶら下っている。

「早う、引き綱におさわりやす。お産のおまじないやさかいに」

孫らしい若い娘にいつている老婦人の声が耳に入ってきた。

小菊も、つられて引き綱にさわろうとしたが、急に、その手を引っ込めた。

色街いろまちづとめの自分の身分を考えて、子供を産むことを断念したのだろうと、沢木には、そんな小菊が不憫おぼれだった。

神輿が行ってしまうと、沢木は、小菊を連れて、茶店に入った。

赤い毛氈もうせんを敷いた縁台に座り、だんごと薄茶おっすを注文した。

小菊は、きれいな手さばきで、茶碗をまわし薄茶を飲んでゐる。飲みおわると、彼女は、あたりを見まわした。

「すごい活気だね。昼の時代祭の華麗さとはちがって、男っぽい祭だ」  
沢木がいうと、小菊もうなずいたが、眼は、別のところを見ている。

「どうしたの？」

「いや、あそこに、お座敷によろ来はるお客さんが市加代姐さんと行かはるんどす」

小菊の指さす方をみると、恰幅のいい紳士が、若い女を連れて、山の方に歩いて行くところだった。

「誰なんだ？ あの人」

沢木がきいたが、小菊は黙っている。お座敷のお客のことは、なるたけ言いたくないのだろう。

沢木も、それ以上きかず、じつと見ていたが、ふと気がつくとき、二人のあとを、サンダラスを掛けた女性が、そつと、尾けているのに気づいた。

「あの人が尾けているみたいだね？」

「へえ。それで見えてたんどす。あの女の人は誰なんやろうと想着て」

やがて、三人は、視界から消えた。

「さあ、そろそろ送って行くこうか。遅くなると、女将が心配するから」

沢木は、小菊を促して立ち上った。

翌日、なにげなく、テレビを見ていた沢木は、事件のニュースに変わった途端に「あつ」といって、くい入るように画面をみつめた。

昨夜、鞍馬の火まつりが終わったとき、一つの死体が発見されたという事件だった。

死んでいたのは、祇園で芸妓をしている市加代さん二十五歳で、灯油をかぶり、焼身自殺したものと思われませんが、他殺の線でも捜査が行われています。

アナウンスのあと、顔写真が画面に出た。

踊りにでも出たときのらしく、美しい日本髪姿である。

それを見て、沢木は、はっとした。それは、昨夜、鞍馬でみた男性が連れていた女性だったからである。沢木は、座敷には、舞妓を主に呼ぶのだ。市加代という芸妓は見たことがなかった。

へあのときまで生きていたのに、どうしたのだろうか？ あの男性が殺したのではないか

……

沢木は、考え込んだ。



連れがあれば、灯油をかぶって焼身自殺するのをとめないはずはないし、また、隙をみ  
て死んだとしても、死体を置きざりにするはずがなかった。

「小菊も、ニュースを見てびっくりしているだろう。それとも、まだ、眠っているだろう  
か……」

と考えていたとき、電話のベルが鳴った。

出てみると、その小菊だった。

「せんせ、テレビ見りましたア？ 市加代姐さんが死なはったんどす」

小菊は、息をきらせていう。

「うん。今、見たところだ。市加代というのは、僕の座敷に来たことはないが、昨夜のあ  
の女性だろう？」

「へえ。そうどす。それでよけいびっくりしまして。あのあと死なはったんどす。殺人  
ですやろか？」

推理小説の好きな小菊が、興奮している様子が、声だけきいていてもわかる。

「そっちにも、刑事が調べに行ったんだろう？ みんなどういってるんだ？」

「市加代姐さんは、きれいやし、よう売れてはって、自殺する動機なんてないとみんなゆ  
うてはります」

「動機ねえ……」